29pmG-061

大学における医療人養成のために薬学生が理解すべき疾患とは？

○小竹　武[1], 井上　知美[1], 野口　知世[1], 松本　優里香[1], 髙田　充隆[1], 掛樋　一晃[1], 野村　守弘[2], 山添　譲[2]（[1]近畿大薬, [2]近畿大病院）

【目的・方法】日本医療薬学会第 23 回年会で 6 年制薬学部実務実習生に患者・消費者に直接関連するコミュニケーション、セルフメディケーション、服薬指導、処方・疾患解析の能力が不足していることが指摘され、特に薬物療法と患者の評価能力を養成することが重要であることを報告した。しかし、現行のカリキュラムではすべての疾患を網羅的に教育することは困難であるため、実務実習事前に特に理解しておくべき疾患、病院・薬局実務実習で教材として使用されている疾患、使用したい疾患、使用困難な疾患について実務実習協力医療施設 268 施設（病院 52、薬局 216）にアンケートを実施した。

【結果・考察】国際疾病分類第 10 版を改変して疾患に簡易番号を割り当て複数番号選択回答とし、推奨教育教材については自由記述回答とした。回答率は 54.5%、有効回答率は 51.8%であった。実務実習事前に理解しておくべき疾患は糖尿病、高血圧性疾患、感染症、喘息、胃潰瘍及び十二指腸潰瘍、パーキンソン病、骨粗鬆症が上位であり、実務実習で教材として使用された疾患の上位とほぼ同じであった。教材として使用したい症例として、理解すべき上位の疾患以外に認知症、関節リウマチ、乳房,子宮の悪性新生物、腎不全が挙げられた。実務実習で教育が困難な疾患の上位として、統合失調症、躁うつ病のような精神疾患と悪性腫瘍疾患であり、患者対応に特別な配慮を要する疾患が回答されていた。教育教材として推奨された症例は 54 症例であり、上位の疾患から高血圧 9 例、糖尿病 7 例、腎疾患 7 例、パーキンソン病 4 例、関節リウマチ 4 例、胃がん 3 例などであった。今回の結果から、実務実習において実践的になされている糖尿病、高血圧性疾患、感染症などの罹患率の高い疾患の教育は特に重要であることが示されたが、教育が困難である認知症などの精神疾患や悪性腫瘍などの疾患を例題とした臨床電子教材の作成の必要性も課題として提起されたと思われる。